

## 「リパブリック賛歌」の原曲

櫻 井 雅 人

### 1 はじめに

「リパブリック賛歌」(“Battle Hymn of the Republic”)として一般に知られているこの旋律は、日本でも明治時代以来親しまれて、賛美歌から商業・ソングに至るまで数多くの替え歌が作られてきた<sup>1)</sup>。「リパブリック賛歌」そのものも「ジョン・ブラウンの亡骸」(“John Brown’s Body”)の替え歌であって、さらにさかのぼると旋律は賛美歌の「おお、兄弟たちよ、我らに会わないか」(“Say, Brothers, Will You Meet Us?”)から来ている。この旋律は二次的・三次的(さらに四次的など)に「リサイクル」されてきたのである。「リパブリック賛歌」の作詞者はジュリア・ウォード・ハウ(Julia Ward Howe, 1819-1910)で、この歌詞の成立についてはかなりのことがわかっているが、曲の系譜はいまだに諸説が入り乱れている。筆者自身も「このメロディーは、1852年ごろ William Steffe によって “Say, Brothers, Will You Meet Us?” として書かれた」との誤った解説文を書いたことがあるので、本稿では反省をこめてこのあたりの事情をもう少し掘り下げて論じることにした。

### 2 「おお、兄弟たちよ、我らに会わないか」など

ジェイムズ・ファルドによると、1857年12月19日付けでアメリカ議会図書館にチャールズ・ダンバー『キャンプ・ミーティング・ハーブとリヴァイヴァル聖歌隊員』(Charles Dunbar, *Camp Meeting Harp and Revival Chorister*)の版權登録の記録が残されているが、この原本は見当たらない。しかし、同じくダン

バーの『ユニオン・ハーブとリヴァイヴァル聖歌隊員』(*The Union Harp and Revival Chorister*)のほうは、著作権の登録はなされなかったが、1858年にシンシナティーで出版され、その264ページに“My Brother Will You Meet Me”<sup>2)</sup>として曲と歌詞(“Say my brother will you meet me”で始まる)が載っている(ただし、“Glory Hallelujah”のコーラス箇所に曲はあるが歌詞はない)。これはメソジストの賛美歌として知られるようになった。また、1858年11月27日付けで“Brothers, Will You Meet Us?”がスコフィールド(G. S. Scofield, New York)によって登録されている。この楽譜も発見されていないが、『アワー・マンスリー・キャスケット』(*Our Monthly Casket*, published by the Lee Avenue Sunday School, Brooklyn) 1858年12月号、および1859年の『リー・アヴェニュー・コレクション』(*Lee Avenue Collection*)に再録されている、という<sup>3)</sup>。以下は1872年の『リヴァイヴァリスト』(No.173)に『リー・アヴェニュー・キャスケット』(*Lee Avenue Casket*)から転載されたというファクシミリ版<sup>4)</sup>からで、書名から判断する限りでは出版社も同じようであり、1858年版と違いはないと思われる。

1. Say, brothers, will you meet us (3 x)

On Canaan's happy shore.

(Chorus)

Glory, glory, hallelujah, (3 x)

For ever, evermore!

2. By the grace of God we'll meet you, (3 x)

Where parting is no more.

3. Jesus lives and reigns for ever, (3 x)

On Canaan's happy shore.

詩情豊かな歌とは言えないが、素朴な歌詞で旋律は覚えやすく、同じ歌詞を3回繰り返すなど、キャンプ・ミーティング(野外の伝道集会)にふさわしい構成になっている。リズムは賛美歌風であるが「リパブリック讃歌」のコーラス部分とほぼ同じ旋律である。ただし、ヴァースと折り返しにおいて同じ旋律を繰り返していて、「リパブリック讃歌」の冒頭に見られるアウフタクトは使われていない。また、この賛美歌はジュリアンの『賛美歌学辞典』<sup>5)</sup>に項目・言及がないが、いくつかの賛美歌集(日曜学校やYMCAなど)に収録されている<sup>6)</sup>。出典を同じく『リヴァイヴァリスト』173番からと称する「おお、兄弟たちよ、我らに会わないか」(これはファクシミリ版ではない)がローレンツ『グローリー・ハレルーヤ』<sup>7)</sup>に掲載されているが、2番の歌詞(および、“*In Canaan's happy shore*”の前置詞)が異なっている。この歌詞は別の版からであろう。

2. Say, sisters, will you meet us (3 x)

In Canaan's happy shore.

ジョージ・パリン・ジャクソン『初期アメリカのスピリチュアル民謡』<sup>8)</sup>には、brothersはsistersなどと置き換えて歌われるとの注があり、他にも“That will be a happy meeting, etc. / On Canaan's happy shore.”という連が紹介されている。ジャクソンによれば、“Say, Brothers, Will You Meet Us?”は「いまだに」(1930年代のこと)南部の黒人教会で歌われている(“still popular”), という。ただし、彼が『白人霊歌と黒人霊歌』<sup>9)</sup>に収めた黒人教会版(曲は“John Brown's Body”)の歌詞は“The ol'-time religion it is good enough for me, / The ol'-time religion it is good enough for me, / The ol'-time religion it is good enough for me / As we go marching home.”というもので、注で「1933年5月21日にテネシー州ナッシュヴィルのジーマ・ヒルズ・プリミティブ・バプティスト教会(Zema Hill's Primitive Baptist Church)で筆者[ジャクソン]によって採録された。1872年のホワイトのフィスク・ジュビリー歌集(White's Fisk Jubilee Songs)の14と140ページに以前の版がある」と述べてい

る。なお、1932年に採録の“O Brothers Will You Meet Me”は、歌詞はかなり似ているが、曲は違う<sup>10)</sup>。歌詞のほうは1808年のバプティストの『ボストン・コレクション』(*Boston Collection*, p.155)にあるという<sup>11)</sup>。黒人たちがこれと思われる歌を1862年に歌っていた記録があり、1862年5月31日号の『全米反奴隷制スタンダード』(*National Anti-Slavery Standard*)紙(週刊)にサウス・カロライナ州セント・ヘレナ島からの同月の報告として、“John Brown’s Body”はもっとも人気があって知られている歌の一つであるが別の歌詞で歌う、という記事がある。ディーナ・J. エプスタインはもしかするとこの歌は“Say, Brothers, Will You Meet Us?”ではなかろうか、と言う<sup>12)</sup>。

以上のごとく、一般には1858年に登録された「おお、兄弟たちよ、我らに会わないか」が曲の初出文献とされている<sup>13)</sup>が、リーヴィー・コレクションに「1855年」に出版されたと称するミンストレル・ソングの“*She Had Such Wheedling Ways*”がある。表紙には *Songs & Ballads, As Sung by R. Bishop and G. Swain Buckley of Buckley’s Minstrels* と書かれている楽譜で、歌の途中に挿入されたコーラス部分は末尾にいくらかの違いがあるものの明らかに“John Brown’s Body”のメロディーであり、本稿執筆の際に参照した他のいかなる文献・資料にも言及されていない<sup>14)</sup>。表紙・譜面からは出版年が確認できない。もしも以下の書誌データのように「1855年」が正しければより古い曲の記録となるが、ディクター＝シャピロによると、この出版社が Henry Tolman & Co. という社名で表紙に記載された住所(291 Washington Street, [Boston])で営業したのは1861年である<sup>15)</sup>ので、データの誤りかもしれない。

Title : *She Had Such Wheedling Ways*.

Composer, Lyricist, Arranger : S. Tute.

Publication : Boston : Henry Tolman & Co., 1855.

Form of Composition : strophic with chorus

Instrumentation : piano and voice

First Line : Perambulating Oxford Street one day I chanc’d to meet a

pretty little damsel dress'd so beautifully neat

First Line of Chorus: Oh! she was a perfect screamer, Oh! how much I did esteem her

Performer: Sung by R. Bishop and G. Swain Buckley of Buckley's Minstrels

さらに、エレン・ジェイン・ローレンツによれば、“Say Brothers”は1851年の『シオンの歌』(*Songs of Zion*, 1851)まで遡ることができる<sup>16)</sup>。この1851年を起源とする説を『ユナイティッド・メソジスト賛美歌集』の解説書<sup>17)</sup>が採用している。

### 3 作曲者は誰か

作曲者について、1883年まではまったく情報がなかった。1881年に出版されたヘレン・ケンドリック・ジョンソンの『私たちの愛唱歌と作者たち』<sup>18)</sup>では、“John Brown’s Body”のいくつかのスタンザの作詞者については名前が挙げられているが、作曲者については何も書かれていない(1859年にサウス・カロライナの黒人教会で“Say, brothers, will you meet us”という歌詞で歌われた、とあるのみ)。これまで名乗り出た主な候補者は、ステッフ(William Steffe)、ビショップ(Thomas Brigham Bishop)、ジェローム(Frank E. Jerome)である。このうちステッフは、いまでも多くの楽譜等で作曲者として扱われており、しかるべき音楽史や解説書等でも、断言するものから可能性を示唆するものまで扱いに違いはあるが、作曲者として名前が記されている<sup>19)</sup>。このほかに Traditional などとするもの<sup>20)</sup>、完全にステッフを無視しているもの<sup>21)</sup>、あるいはステッフを改作者とするもの<sup>22)</sup>などがある。

カンザス州ラッセル(Russell, Kansas)のフランク・E・ジェロームは、1889年7月号の『アメリカン・ミショナリー』誌に自作であるといういきさつを書いた。それによると、1861年にカンザス州レヴンワース(Leavenworth)において、“Go tell Aunt Sussey”<sup>23)</sup>と日曜学校賛美歌の“I love to go to Sunday-

school”の2曲を組み合わせ、耳にした“John Brown's soul would roll on and crush them”という言葉をもとにして“John Brown's body lies slumbering in the grave”などの歌詞を作った（この時13歳であったという）。これはショーの中で歌われて、聴衆にいた兵士たちが覚えて歌い始め、のちにさまざまな歌詞が加わった<sup>24)</sup>、という。しかし、他の記録と年代等が合わないので、ジェロームの作り話と考えられる。

トマス・ブリガム・ビショップは minstrel・ショーにも加わったことがある作曲家であって、少なくとも10数点のシート・ミュージックを出版したことが知られている。1944年に『グローリー・ハレルヤーリパブリック賛歌物語』を書いたキャサリン・リトル・ベイクレスはおおよそにおいてビショップ作曲説を支持しているように見える（後述するステップには証拠がないことが大きな理由かもしれない）。ビショップが1861年にシンシナティ（賛美歌初版の発行地でもある）のジョン・チャーチ社から楽譜を出版しようとした時に戦争が始まり、ジョン・ブラウンの代わりにエルズワース大佐（南北戦争で最初に戦死した将校）の名前を使って“Ellsworth's body lies a mould'ring in the grave”という歌詞〔4節も参照〕を作り、同年12月に作詞者・作曲者の名を付けずに出版された<sup>25)</sup>、という。さらに、明らかに後の筆写であるが、彼の直筆の楽譜が残されている。ピアノ伴奏付きの“Glory, glory, hallelujah”の部分の楽譜で、譜面には「1855年に“Glory Hallelujah”としてT・ブリガム・ビショップが作詞作曲した」という文言が記されている<sup>26)</sup>。ジョン・チャーチ社版が出版された時にはすでに軍隊で大いに歌われて、いくつかのシート・ミュージックが出ていたし、それ以前に賛美歌にも利用されていた、というのも不思議な話であるし、プロの作曲家でありながら作者名のない楽譜として出版したことも理解に苦しむ。もしもジョン・チャーチ社版がビショップによるものであると仮定しても、それは既存の楽譜に新たな歌詞をいくつか加えただけのもので「新曲」ではありえない。さらに、ビショップはいくつかの他人の作品についてもそれらが自作であると主張した人物であるから、その言はあまり信用できない。現在では、もちろんビショップ説は受け入れられていない。

ウィリアム・ステッフが作曲したという説は、1883年になって『グランド・アーミー・スカウトと兵士の手紙』誌 (*Grand Army Scout and Soldiers' Mail*, Nov. 3, 1883) に O・C・ボビーシェル (Major O. C. Bobbyshell) が「“ジョン・ブラウンの亡骸”の起源”(“Origin of ‘John Brown’s Body’”) という論文を書いてからのこと、とされる<sup>27)</sup>。ブランダー・マッシュューズは1887年の『センチユリー』誌<sup>28)</sup>で、ボビーシェルを引き継いで、ウィリアム・ステッフを“John Brown’s Body”の作曲者として紹介し、以後ステッフ説が少しずつ広まっていった<sup>29)</sup>。マッシュューズによると、フィラデルフィアのウィリアム・ステッフは1856年にサウス・カロライナ州チャールストンの消防団 (fire-company) から“Say, bummers, will you meet us?”というコーラスのある一連の歌詞に曲を付けるように依頼された。曲ができると新しい歌詞が付け加えられ、後にこれがさらに発展して“Say, brothers, will you meet us”というキャンプ・ミーティング賛美歌となった、という。しかし、ボイド・スタトラーがステッフからの間接的な話として伝えているところによると、1855年か56年にフィラデルフィアのグッドウィル消防団 (Good Will Engine Company) がボルティモアのリバティー消防団 (Liberty Fire Company) を歓迎するために彼が依頼されて“Say, bummers, will you meet us?”に付けた曲である、となっていて食い違いがある<sup>30)</sup>。さらに、スタトラーは、ステッフの祖父が若かりし頃すでに「古い曲」であって、おそらくはステッフは無意識に覚えていたのかもしれないがそれを作り変えた、と考える。ステッフは1911年に死去した (ちなみに、ジュリア・ウォード・ハウはその前年にこの世を去っている)。生涯フィラデルフィアで事務員・保険代理業者・ストーヴ工場支配人などを勤め、50年以上もフリーメイソンとして活動したが、作曲をしていたという記録は残っていないし他の作品もない<sup>31)</sup>。また、多くの解説では賛美歌の“Say, Brothers, Will You Meet Us?”を作曲したと伝えられているが、以上はかなり不確かな記述でも、世俗的な“Say, bummers, will you meet us?”の歌詞に旋律を付けたのであって、彼が「日曜学校賛美歌作曲家」<sup>32)</sup>であったという証拠はまったくない。いずれにせよ、ステッフ本人の「証言」(1885年から87年にかけて書かれた手紙がある、という)

が残っているだけで楽譜などの「物証」も他の「状況証拠」もないし、「証人」もない<sup>33)</sup>。「ステップ作曲」というには、あまりにも根拠が薄弱である。なお、“Say, bummers, will you meet us?” と関連があるとみられる以下の歌詞が“Bummers, Come and Meet Us” というソング・シートにある<sup>34)</sup>。これは“McClellan is our leader now, we've had our last retreat” で始まる歌で、“Say, brothers, will you meet us?” も含むいろいろなスタンザを寄せ集めて構成している。

Oh, bummers, come and meet us ;

Oh, bummers, come and meet us ;

Oh, bummers, come and meet us ;

Way down in Dixie's Land.

曲はスウェーデンから来ているという説があり、オックスフォード版『ポピュラー音楽辞典』でも言及されている<sup>35)</sup>ので一言書き加えておく。この説はスタトラーが紹介しているもので、「おそらく1700年以前」の酒飲み歌 (drinking song) である、という<sup>36)</sup>。これに対してフェルドによれば、スウェーデンの“Bröder Viljen I Gå Med Oss” (題は“Halta Lottas krog”とも呼ばれる) は19世紀後半になって知られるようになったものであり、年代は「1875年頃以降」であるから原曲ではありえない<sup>37)</sup>。その旋律はコーラス部分 (“Glory, glory, hallelujah”) とほぼ同じである。

#### 4 「ジョン・ブラウンの亡骸」

1861年4月にボストンの民兵組織である第2歩兵大隊 (Second Battalion of Infantry), 通称「タイガーズ大隊」(the Tigers), に配属になったジョージ・キンボールは、以下の話を伝えている。大隊本部のあるボストン港ジョージズ島のウォレン砦 (Fort Warren) で、砦の修復などの任務に就いた。兵士たちは任務の合間などによく歌を歌った。賛美歌の「おお、兄弟たちよ、我らに会わな

いか」は旋律が覚えやすくリズムにもスウィングする動きがあったので人気があり、コーラス部分を元気よく大勢で歌った。当時その部隊にはジョン・ブラウンというスコットランド系の兵士がいて、1859年に Harpers Ferry の兵器廠を襲撃して死刑になった熱烈な奴隷制廃止論者とたまたま同じ名前であったので、しばしばからかい的となっていた。集合時刻に遅れたりすると “This can't be John Brown—why, John Brown is dead.” などと、また “Yes, yes, poor old John Brown is dead; his body lies mouldering in the grave.” などと言われた。これが替え歌に取り入れられ、“He's gone to be a soldier in the army of the Lord” などのさまざまな歌詞が加えられ、テンポも少し速めて、“John Brown Song!” が出来上がった。“Ellsworth's body” の歌詞のほうは受けがよくなかった。これは5月のことである。すぐに人気が出て、ソング・シートが売りに出た。初めは音楽家であったグリーンリーフ (James E. Greenleaf) が編曲をしたが、マーシュ (C. S. Marsh) が新たな歌詞を加えた1枚刷りの楽譜 (題は “John Brown” で、“Origin, Fort Warren. / Music arranged by C. B. Marsh” と書かれている) を61年の5月末か6—7月に出版した、という<sup>38)</sup>。ただし、この楽譜は男声4部用に編曲されているもので、一般の旋律とはかなりの違いがある (また、instrumental がほんの少しだけ書き加えられていて、2段目3小節目のテナーの音符に大きな誤りがある)。

ジェイムズ・ファルドによれば、1861年5月12日に、ウォレン砦における北部の新兵訓練のための国旗掲揚式で、おそらく最初の公の場での演奏が行われ、また7月18日にはボストンの軍隊行進で歌と演奏がなされた、と地元の新聞が報じている。楽譜付きの “John Brown” は61年7月16日に、また別の “The Popular John Brown Song” と題するシート・ミュージックが7月19日に J. W. Turner, Boston によって著作権の登録がなされている。20日にも別の版 (Russell & Patee 出版) の登録 (題名は “John Brown's Song”) があるなど、一気に大流行した<sup>39)</sup>。ニューヨークのブロードウェイ (通り) でも7月24日に第12マサチューセッツ義勇歩兵部隊 (12th Massachusetts Volunteer Infantry) は “John Brown's Body” の曲に合わせて行進し、このため「ハレルーヤ連隊」(Hal-

lelujah Regiment) とも呼ばれたという<sup>40)</sup>。なお、ボストンのジョン・ブラウン軍曹は、写真も残っているが、1862年6月6日にヴァージニア州のラパハノック川(Rappahannock)を渡河する際に水死した<sup>41)</sup>。

このように当初はブラウン軍曹の歌であったが、じきにオサワトミのジョン・ブラウン(John Brown of Osawatomie)と結び付けられて、新たなる歌詞が次々と作られていった。たとえば、年内(1861年)には“The John Brown Song, or, Glory Hallelujah. With New and Revised Words”(Chicago: Root & Cady, 95 Clark Street, 1861)という楽譜<sup>42)</sup>がシカゴで出版され、これは全編をとおしてこの奴隷制廃止論者を謳った歌詞になっている。歌は大流行するとともにブラウン軍曹との結びつきはすっかり忘れられていった。

## 5 「リパブリック讃歌」

歌詞の成立については、ハウ自身があちこちで講演し、また雑誌や自伝にも書き残しているのだから、かなりよく知られている。ハウは1887年発行の『センチュリー』誌において「リパブリック賛歌覚書(Notes on the Battle-Hymn of the Republic)」という短いエッセイを書いている<sup>43)</sup>。さらに、1888年から翌年にかけてハウは自伝(“Reminiscences of Julia Ward Howe”)を『アトランティック・マンスリー』誌に連載する<sup>44)</sup>。これは完結直後に単行本となって出版された<sup>45)</sup>。それによると、1861年、南北戦争は4月に始まり、11月に夫(リンカーン大統領が任命した衛生委員会のメンバーであるDr. Samuel Gridley Howe)に従って、マサチューセッツ州知事のジョン・A・アンドルー(John A. Andrew)夫妻や牧師のジェイムズ・フリーマン・クラーク(Rev. James Freeman Clarke)らとともに、ボストンを発って首都ワシントンに赴いた(このとき大統領にも面会している)。近郊の観兵式を見に行ったが、近くで戦闘が始まり、帰り道は対向する軍隊のために馬車は渋滞して、その間に皆で“John Brown's Body”を歌った<sup>46)</sup>。クラークは彼女にもっと適した歌詞を書くことを勧めた。滞在先のウィラーズ・ホテル(Willard's Hotel)の一室で、翌朝まだ暗いうちにハウは起きだして、草稿をしたためた。草稿を見ると一気に書きあげ

たようである(ただし、現存のマニュスクリプトは清書かもしれない)。11月19日のことであった。神の怒りによってもたらされた戦争であり神の真理が進軍しているといった内容で、現実の戦いと聖書的なイメージとを重ね合わせた作品である。曲はリヴェイヴァリズム的であるが、歌詞は格調高く語句も聖書風で古い文体が使われている。

さらに手直しをした原稿を『アトランティック・マンズリー』に送り、同誌編集者のフィールズ(James T. Fields)が“BATTLE HYMN OF THE REPUBLIC”(定冠詞はない)という題名を考えて付け、翌1862年2月号の巻頭に無署名で掲載された<sup>47)</sup>。原稿料は5ドルであった<sup>48)</sup>。5連の詩でコーラス部分は含まれていない。曲名(tune name)が付いていないが“John Brown’s Body”の曲であることはすぐに理解されたであろう。4月9日には作詞者名(Mrs. Dr. S. G. Howe)の付いたシート・ミュージック<sup>49)</sup>がボストンで出版され、歌詞は同じく5連で題名に定冠詞はなく、3声部のコーラス部分(“Glory, Glory Hallelujah! / Glory! Glory! Glory Hallelujah!”)であって、現行の版よりも“Glory”が1つ多くてリズムが違う)が加えられている。初めの草稿には、いくつかの語句の相違のほかに、以下の第6連が含まれていた。草稿版の出版をハウは嫌がっていたが、最終的には同意し<sup>50)</sup>、『自伝』に手書き原稿のファクシミリ版が付け加えられた。ほとんどの楽譜にこの連は採用されていないが、イギリスの賛美歌集『賛美の歌』と『BBC 賛美歌集』、アメリカの『ユナイティッド・メソジスト賛美歌集』には含まれている<sup>51)</sup>。

He is coming like the glory of the morning on the wave  
 He is wisdom to the mighty, he is honor to the brave  
 So the world shall be his footstool, and the soul of wrong his slave  
 Our God is marching on.<sup>52)</sup>

## 6 結び

ステップ作曲説を完全に否定できないかもしれないが、「おそらくはステップ

は作曲者ではない」あるいは「作曲したという証拠がない」とは言えるであろう。もとより資料上の制約があるので決定的な結論までには至らなかったが、それでも現在わかることはおおよそこれくらいで、結局のところ、新たな事実が判明するまでは「作者不詳」に立ち戻るのが今のところもっとも正しい判断のように思われる。

楽譜・資料等は以下のウェブサイトも参照した。これらおよび注における URL は2004年11月末現在である。

Making of America, Cornell University Library

<http://cdl.library.cornell.edu/moa/>

Making of America, University of Michigan

<http://www.hti.umich.edu/m/moagrp/>

American Memory, Library of Congress

<http://lcweb2.loc.gov/ammem/index.html>

The Lester S. Levy Sheet Music Collection, Johns Hopkins University

<http://levysheetmusic.mse.jhu.edu/index.html>

Bodleian Library Broadside Ballads, University of Oxford

<http://www.bodley.ox.ac.uk/ballads/ballads.htm>

国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<http://kindai.ndl.go.jp/>

- 1) 「うたへ、いはへ」(奥野昌綱・戸川残花編『童蒙讃美歌』1890) [1 箇所記譜上の誤りがあると思われる], 戸川安宅作詞「すすめすすめ」(納所弁次郎編『日本軍歌』1892) [以上国立国会図書館近代デジタルライブラリー], 「悪魔と戦へ」(三谷種吉『基督教福音唱歌』1898, 譜付1900) [手代木俊一監修『明治期讃美歌・聖歌集成』第28巻, 大空社, 1997], 山室軍平作詞「いのちおしまぬ三百の」, 「こは同胞(はらから)を」(以上『救世軍歌集』1997), 神長瞭月作詞「薔薇の唄」[さらなる替え歌については有馬敲『替歌・戯歌研究』KTC 中央出版, 2003, pp.221-22], 坂田寛夫作詞「ともだち賛歌」(1965), 「おはぎがお嫁に」, 「ごんべえさんの

赤ちゃん」,「おたまじゃくしはかえるの子」など(大塚野百合『賛美歌・唱歌ものがたり』創元社,2002,pp.186-91;「みんなの歌」研究会編・長田曉二監修『大きな古時計の謎』飛鳥新社,2002,pp.129-42;鳥越信『子どもの替え歌傑作集』平凡社,1998,pp.20-34参照)。もちろん本国アメリカでもさらに多数の替え歌があり,代表的なものとしては“Solidarity Forever”(Ralph Chaplin作詞,1915)[Edith Fowke & Joe Glazer, *Songs of Work and Protest*, 1960; rpt. New York: Dover, 1973, pp.12-13など;中江隆介訳詩「一致団結」,江波戸昭・三橋一夫編『フォーク・ソングを歌おう』音楽之友社,1967,pp.100-01];“John Brown's Baby Has a Cold Upon His Chest”(1923)[「ごんべえさんの赤ちゃん」の元歌];“The Burning of the School”[“My [Mine] eyes have seen the glory of the burning of the school”で始まる;Josepha Sherman & T. K.E. Weisskopf, *Greasy Grimy Gopher Guts: The Subversive Folklore of Childhood*, Little Rock: August House, 1995, pp.103-08;Mary and Herbert Knapp, *One Potato, Two Potato: The Folklore of American Children*, New York: Norton, 1976, pp.173-74]など。また, Vicki L. Eaklor, *American Antislavery Songs: A Collection and Analysis* (New York: Greenwood Press, 1988, nos. 97, 476, 480, 486)に4編, Philip S. Foner, *American Labor Songs of the Nineteenth Century* (Urbana: University of Illinois Press, 1975, pp.113, 138, 221, 253, 310, 313, 323)に少なくとも7編, Irwin Silber, ed., *Songs America Voted By* (Harrisburg, Pa.: Stackpole Books, 1971, pp. 87, 108, 140, 156, 180, 225, 226, 239, 260, 277)に10編, Edward Arthur Dolph, “Sound Off!”: *Soldier Songs From Yankee Doodle to Parley Voo* (New York: Cosmopolitan Book Corporation, 1929, pp.52, 169)に2編, Ed Cray, *The Erotic Muse: American Bawdy Songs*, 2nd ed. (Urbana: University of Illinois Press, 1992, p. xxvi)に2編ある。

- 2) “Brothers, Will You Meet Me”という曲名でも知られていたようで, American Memoryにこの曲名を指定した“John Brown's original marching song. Tune—Brothers, will you meet me.”(Johnson, Song Publisher, &c., Phila. [n. d.])など8点のソング・シート(歌詞のみ)がある。
- 3) 以上はJames J. Fuld, *The Book of World-Famous Music: Classical, Popular and Folk*, 5th ed. (New York: Dover Publications, 2000, p.132)による。
- 4) Joseph Hillman, ed., *The Revivalist* (Troy, NY: 1872, no.173). George Kimball, “Origin of the John Brown Song”(*The New England Magazine*, vol.7, issue 4, Dec. 1886, p.372) [Making of America, Cornell University Library]に転載されたファクシミリの楽譜を参照した。 *Hymn and Tune Book of the Methodist Episcopal Church, South*, Round Note Edition (Nashville, TN; Publishing

- House of the Methodist Episcopal Church, South, 1899) にも No.899: "Say, Brothers" として収録されており、編曲も含めて実質的には同じ版である。
- 5) John Julian, *A Dictionary of Hymnology*, 2 vols. (1892; 1907, rpt. New York: Dover, 1957).
  - 6) 以下は歌詞のみの賛美歌集 (いずれも Making of America, University of Michigan に収録) で、作詞者・作曲者の名前はない。Young Men's Christian Associations, *Union Prayer Meeting Hymns* (Philadelphia: American Sunday-school Union, 1858), p.180 [歌詞は2連のみ; Chorus なし]; Silas Farmer, comp., *The Association Hymn Book, compiled for Young Men's Christian Associations and Union Religious Meetings* (Detroit, Mich. : [1869]), p.64 [Chorus なし]; *The Baptist Praise Book*, prepared by Richard Fuller, E. M. Levy, S. D. Phelps, H. C. Fish, Thomas Armitage, E. T. Winkler, W. W. Everts, Geo. C. Lorimer, and Basil Manley, Jr. (New York and Chicago: A. S. Barnes & Company, 1872), p. 241 [Chorus あり].
  - 7) Ellen Jane Lorenz, *Glory, Hallelujah!: The Story of the Campmeeting Spiritual* (Nashville, TN: Abingdon, 1980), p.121.
  - 8) George Pullen Jackson, *Spiritual Folk-Songs of Early America* (1937; rpt. New York: Dover, 1964), pp.206-07 [tune name: SAY BROTHERS]. また "Hymns of the Populace" (*Littell's Living Age*, No.1192, 4th Ser., No.53, 6 April 1867) [Making of America, Cornell University Library] という記事 (著者名なし; *Blackwood's Magazine* からの転載) に8連から成る版 (歌詞のみ、うち2連は繰り返し) が紹介されている (p.13).
  - 9) Jackson, *White and Negro Spirituals* (1944; rpt. New York: Da Capo, 1975), p.179.
  - 10) George Pullen Jackson, *Another Sheaf of White Spirituals* (1952; rpt. New York and Philadelphia: Folklorica, 1981), p.8.
  - 11) Jackson, *White and Negro Spirituals*, p.178.
  - 12) Dena J. Epstein, *Sinful Tunes and Spirituals: Black Folk Music to the Civil War* (Urbana, Chicago & London: University of Illinois Press, 1977), p.259n. なお、黒人社会で "John Brown's Body" が歌われ始めたことについては、Lynn Abbott and Doug Seroff, *Out of Sight: The Rise of African American Popular Music 1889-1895* (Jackson: University of Missouri Press, 2002), pp.211-14.
  - 13) 賛美歌集 (注19, 20, 32参照) などで曲の初出を "1852年" としているものがあるが、その根拠は不明.
  - 14) Toll, Lott, Mahar, Cockrell, Nathan, Abbot & Seroff 等の ミンストレル・

ショー関係の主な文献, また Enoch Pratt Free Library などの主な歌謡索引を参照したが, この歌の手掛かりは得られなかった。S. Tute とは Samuel Tute (1890年代にいくつかの作品を残している) のことであろうか。

- 15) Harry Dichter and Elliott Shapiro, *Handbook of Early American Sheet Music 1768-1889* (New York: Dover, 1977 [reprint of *Early American Sheet Music: Its Lure and Its Lore, 1768-1889*, 1941]), p.238.
- 16) “[T]he present study reveals a publication in *Songs of Zion*, 1851.” (Lorenz, *Glory, Hallelujah!*, p.121). しかし, 1851年版の *Songs of Zion* (Boston: American Tract Society) には “Say Brothers” も類似の曲も含まれていない。
- 17) Carlton R. Young, *Companion to The United Methodist Hymnal* (Nashville: Abingdon Press, 1993), p.623.
- 18) Helen Kendrick Johnson, *Our Familiar Songs and Their Authors* (New York: H. M. Caldwell Company, 1881, 1896), pp.476-78.
- 19) Dichter and Shapiro, *Handbook of Early American Sheet Music*, p.111 [“The composer of *Glory Hallelujah* is unknown, but it has been claimed to be the work of William Steffe”]; *The Hymnal Army and Navy* (Washington: United States Government Printing Office, 1942), no.485 [“William Steffe, 1852”]; The Salvation Army, *Songs for Service Men* (Chicago: The Salvation Army Trade Department, n. d. [1943?]), no.79 [“William Steffe, 1852”]; Sigmund Spaeth, *A History of Popular Music in America* (New York: Random House, 1947), p. 147 [“William Steffe. .. is credited with this music”]; Margaret Bradford Boni, ed., *The Fireside Book of Favorite American Songs* (New York: Simon and Schuster, 1952), p.145 [“is credited to a Southern composer, William Steffe”]; Maria Leiper and Henry W. Simon, eds., *A Treasury of Hymns* (New York: Cornerstone Library, 1953), p.120 [“William Steffe (ca.1852)”]; C. A. Browne, *The Story of Our National Ballads*, rev. by Willard A. Heaps (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1960), p.174 [“originally composed by William Steffe in 1855”]; Irwin Silber, ed., *Songs of the Civil War* (1960; rpt. New York; Dover, 1995), p.23 [“ascribed to William Steffe”]; Hans Nathan, “The United States of America,” in *A History of Song*, rev. ed., edited by Denis Stevens (1960; Norton, 1970), p.421 [“it was William Steffe’s Sunday-school hymn that... became *The Battle Hymn of the Republic*”]; Fowke & Glazer, *Songs of Work and Protest*, p.171 [“began life as a camp-meeting hymn called ‘Say Brothers Will You Meet Us?’ written by a Southern composer, William Steffe, in the middle 1850’s”]; Julius Mattfeld, *Variety Music Cavalcade 1620-1961*, rev. ed. (Engle-

wood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1962), p.111 [“ascribed to William Steffe, but published anonymously”]; John Tasker Howard, *Our American Music: A Comprehensive History from 1620 to the Present*, 4th ed. (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1965), p.255 [“was claimed by a Southern composer of popular Sunday School songs—William Steffe”]; David Ewen, *American Popular Songs: From the Revolutionary War to the Present* (New York: Random House, 1966), p.32 [“generally credited to William Steffe”]; Paul Glass, ed., *Singing Soldiers: A History of the Civil War in Song* (1964, 1968; rpt. New York: Da Capo, 1973), p.5 [“Music: William Steffe”]; William Ehret et al., eds., *The International Book of Sacred Song* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1969), p.244 [“composed by a southerner, William Steffe”]; Wanda Eillson Whitman, ed., *Songs That Changed the World* (New York: Crown Publishers, 1969), p.35 [“the original song credited to William Staffe [*sic*]”]; *Worship in Song* (Kansas City, Missouri: Lillenas Publishing Company, 1972), no.506 [“John William Steffe, 19th Century”]; *Better Homes and Gardens Family Song Book* (n. p.: Meredith Corporation, 1975), p.283 [“written by William Steffe, a Richmond, Virginia composer of Sunday-school songs”]; Charles Hamm, *Yesterdays: Popular Song In America* (New York: W. W. Norton, 1979), p.236 [“is believed to have been written by William Steffe”]; Charles W. Hughes, *American Hymns Old and New; Notes on the Hymns and Biographies of the Authors and Composers* (New York: Columbia University Press, 1980), p.151 [“Composed by William Steffe”]; Edward Jablonski, *The Encyclopedia of American Music* (New York: Doubleday & Company, 1981), p.62 [“probably written by a Charleston, S. C., organist-choirmaster William Steffe (ca.1830-1890). A composer of Sunday school hymns”]; Roger Lax and Frederick Smith, *The Great Song Thesaurus* (New York: Oxford University Press, 1984), p.174 [“possibly by William Steffe”]; Russell Sanjek, *American Popular Music and Its Business*, vol. II (From 1790 to 1909) (New York: Oxford University Press, 1988), p.242 [“Credit... given to South Carolina musician William Steffe”]; Jon W. Finson, *The Voices That Are Gone: Themes in Nineteenth-Century American Popular Song* (New York: Oxford University Press, 1994), p.124n [“The tune is usually attributed to William Steffe”]; Eileen Southern, *The Music of Black Americans: A History*, 3rd ed. (New York: Norton, 1997), pp.210 [“composed in 1852 by a white song-leader, William Steffe”]; *BBC Songs of Praise* (Oxford University Press, 1997), no.156 [“Melody attrib. William Steffe (c.1850)”]; Gwen-

- dolin Sims Warren, *Ev'ry Time I Feel the Spirit: 101 Best-Loved Psalms, Gospel Hymns, and Spiritual Songs of the African-American Church* (New York: Henry Holt and Company, 1997), pp.201-04 ["Music by William Steffe"]; Michael Kilgarriff, comp., *Sing Us One of the Old Songs: A Guide to Popular Song 1860-1920* (Oxford University Press, 1998), p.50, s. v. John Brown's Body ["the music partly inspired by William Steffe's 1858 Methodist hymn Say Brothers Will You Meet Us"]; *African American Heritage Hymnal* (Chicago: GIA Publications, 2001), no.490 ["TUNE ... William Steffe, d.1911"]; *The Folksong Fake Book* (Milwaukee: Hal Leonard, n. d.), p.282 ["Tune based on a hymn by William Steffe"].
- 20) Dolph, "Sound Off!" p.248 ["The words and air have been credited to several different people. In reality the tune comes from an old Negro melody"]; Walter Hines Sims, ed., *Baptist Hymnal* (Nashville: Convention Press, 1956), no.488 ["American Folk Song"]; *Great Hymns of the Faith* (Grand Rapids, Michigan: Singspiration Music, 1968), no.530 ["American melody, c.1852"]; *Songs of Zion* (Nashville: Abingdon Press, 1981), no.24 ["American Camp Meeting Tune"]; Kenneth W. Osbeck, *101 Hymn Stories* (Grand Rapids, Michigan: Kregel Publications, 1982), pp.34-36 ["American melody, c.1852"]; *The Hymnal for Worship & Celebration* (Waco, Texas: Word Music, 1986), no.569 ["MUSIC: Traditional American melody"]; Daniel Kingman, *American Music: A Panorama*, 2nd ed. (New York: Schirmer Books, 1990), p.664 ["traditional tune"]; Indexへの注記; *The United Methodist Hymnal* (Nashville: United Methodist Publishing House, 1989), no.717 ["MUSIC: USA campmeeting tune, 19th cent."].
- 21) Margaret Bradford Boni, ed., *Fireside Book of Folk Songs* (New York: Simon and Schuster, 1947), pp.220-22 [作曲者名なし]; Richard Jackson, ed., *Popular Songs of Nineteenth-Century America* (New York: Dover, 1976), pp.263-64 [作曲者名なし]; *Gospel's Best~Words and Music* (Winona, MN: Hal Leonard, 1983), p.18 [作曲者名なし]; *Hymns of The Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints* (Salt Lake City, Utah: The Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints, 1985), no.61 ["Music: Anon., ca.1861"].
- 22) "This ['Say, bidders, will you meet us'] was changed by an Evangelical, William Steffe, to 'Say, brothers, will you meet us....'" (J. R. Watson, *An Annotated Anthology of Hymns*, Oxford: Oxford University Press, 2002, p.366).
- 23) "Go Tell Aunt Rhody"の先行曲かもしれない。これについては拙稿「ロディーおばさん——アメリカ民謡としてのひろがり」(海老沢敏監修『むすんでひらいて

- の謎』キング・レコード KICG 3077, 2003, ノーツ, pp.30-33) 参照.
- 24) Frank E. Jerome, "The John Brown Song," *The American Missionary*, vol.41, issue 7 (July 1887), pp.189-91 [Making of America, Cornell University Library].
- 25) この楽譜 ("Glory! Hallelujah—As sung by The Federal Volunteers Throughout the Union," Cincinnati: John Church, 66 West Fourth Street, 1861) は Lester S. Levy Sheet Music Collection にある。1861年に "Glory Hallelujah" は数点が発行されていて (Dichter and Shapiro, *Handbook of Early American Sheet Music*, pp.111-12), ジョン・チャーチ版は12月だとすると最初の楽譜ではない。
- 26) 以上, Katherine Little Bakeless, *Glory, Hallelujah! The Story of The Battle Hymn of the Republic* (Philadelphia and New York: J. B. Lippincott Company, 1944, p.98) による。自筆楽譜のファクシミリは口絵 (p. [11]) にある。
- 27) Boyd B. Stutler, *Glory, Glory, Hallelujah!: The Story of "John Brown's Body" and "Battle Hymn of the Republic"* (Cincinnati: [Printed and Bound by C. J. Krehbiel Company], n. d. [1960]), pp.45-46.
- 28) Brander Matthews, "The Songs of the War" (*The Century: A Popular Quarterly*, vol.34, Issue 4, Aug. 1887), p.662 [American Memory].
- 29) たとえば, *Songs That Never Grow Old* (New York: Syndicate Publishing Co., 1913), pp.64-65. ただし, J. P. McCaskey, ed., *Favorite Songs and Hymns for School and Home* (New York: American Book Company, 1899, p.105) および Jane Byrd Radcliff-Whitehead, *Folk-Songs and Other Songs for Children* (Boston: Oliver Ditson Company, 1903, pp.162-63) などに作曲者名は付されていないし, E. O. Excell, ed., *Coronation Hymns* (Chicago: E. O. Excell, 1910, no.356) では "Melody, 'Glory Hallelujah'" と, Joe Mitchell Chapple, ed., *Heart Songs* (1909; rpt. Baltimore: Clearfield, 1997, p.312) では "Old Plantation Melody" としている。
- 30) Stutler, *Glory, Glory, Hallelujah!*, p.46.
- 31) Stutler, p.46.
- 32) Hughes, *American Hymns Old and New*, p.558. 独立した見出しがあって "William Steffe, composer; fl. mid-19th cent." として "He may have composed or adapted the tune for 'Say, brothers, will you meet us'" というが, Theron Brown and Hezekiah Butterworth, *The Story of the Hymns and Tunes* (1906) に "John William Steffe, of Richmond, Va., composer of Sunday School tunes" と書かれていることをそのまま紹介している。Leiper and Simon, *A Treasury of Hymns* (p.121) では "a composer of camp-meeting hymns" である。Jablonski,

*Encyclopedia of American Music* (p.62) の “a Charleston, S. C., organist-choir-master William Steffe (ca.1830-1890). A composer of Sunday school hymns” に至っては、名前以外の経歴はすべてが「創作」である。名前については、D. DeWitt Wasson, ed., *Hymntune Index and Related Hymn Materials*, vol.2 (Lanham, Maryland & London: Scarecrow Press, 1998, p.822) も、Battle Hymn (1852) の見出しの下に “Source: John William Steffe (†1911)” とある (John は不要で、Steffe が作曲者ならば1852年ではありえない)。

- 33) James J. Fuld, “Patriotic Music” (*The New Grove Dictionary of American Music*, vol.3, Macmillan, 1986, p.487) には “Battle Hymn of the Republic” について 19行の記述があるが, “Yet the origins of *Glory hallelujah* are baffling. There is no real substantiation for the various claims that have been made.” と言って, Steffe の名前さえも挙げていない。また, この4巻本のアメリカ音楽辞典に Steffe の見出しもない。
- 34) American Memory (Library of Congress) にある。出版は H. De Marsan (60 Chatham str. New York) で, 年代は不明であるが, 歌詞の内容からして1862年頃であろう。このブロードサイドは Bodleian Library Broadside Ballads にもある。
- 35) Peter Gammond, *The Oxford Companion to Popular Music* (Oxford University Press, 1991), p.44 [“sometimes said to have derived from a Swedish song”]. Kent A. Bowman, *Voices of Combat* (New York: Greenwood, 1987, p. 97) も酒飲み歌を起源とする。
- 36) Stutler, pp.40-41.
- 37) Fuld, p.134.
- 38) George Kimball, “Origin of the John Brown Song” (注4参照)。ここに, これらのソング・シートの図版が掲載されている。歌詞のみの版には出版者名が印刷されていないが, 住所は楽譜版と同じく “256 Main Street, Charlestown, Mass.” である (出版年代は付されていない)。いずれも Stutler (pp.18, 28) に, また楽譜版は Vera Brodsky Lawrence, *Music for Patriots, Politicians, and Presidents: Harmonies and Discords of the First Hundred Years* (New York: Macmillan, 1975, p.357) および American Memory にもある。歌詞のみのソング・シート (“John Brown Song!”) の内容は, 題名は違うが, “Glory Hally, Hallelujah! or The John Brown Song” (H. De Marsan, 54 Chatham Street, N. Y. [n. d.]) と同じである (これは American Memory および Bodleian Library Broadside Ballads にある)。
- 39) Fuld, *The Book of World-Famous Music*, pp.132-34. なお, Russell & Patee 版は冒頭が少し違う旋律であり, “Music by Phillip Simons” と書かれていて, 同年に “Glory, Hallelujah!” (ピアノ伴奏は少し違う) と改題されている (いずれも

The Lester S. Levy Sheet Music Collection にある)。

- 40) Stutler, pp.24-26.
- 41) Stutler, frontispiece, and p.27.
- 42) The Lester S. Levy Collection of Sheet Music にある。この他にもいろいろな歌詞が作られ、黒人霊歌の普及で知られるジュビリー・シンガーズは“John Brown died that the slave might be free”という歌詞で歌った (Andrew Ward, *Dark Midnight When I Rise: The Story of the Jubilee Singers Who Introduced the World to the Music of Black America*, New York: Farrar, Straus and Giroux, 2000, p.216-17)。
- 43) *The Century: A Popular Quarterly*, vol.34, issue 4 (Aug. 1887), pp.629-30. [American Memory, Library of Congress] 注⑧の Matthews の論文のすぐ後に掲載されたので、ハウはステップ説を知っていたはずである。
- 44) *The Atlantic Monthly*, vols.82-83, issues 494-99 (Dec. 1898 - May 1899). [American Memory, Library of Congress]. 該当箇所は99年5月号 (pp.706-708) である。
- 45) Julia Ward Howe, *Reminiscences 1819-1899* (Boston: Houghton, Mifflin & Company, 1899), pp.273-77.
- 46) 「兵士たちが歌っているのを (初めて) 聞いて、それに歌詞を付けた」との解説が多いが、「伝説」である (たとえば, “Julia Ward Howe was sitting in her hotel in Washington listening to soldiers singing ‘John Brown’s Body’ as they marched to the front in December of 1861. As she watched and listened, a poem shaped itself in her mind, and she rapidly put it down on a scrap of paper.” —*The Joan Baez Songbook*, New York: Ryerson Music Publishers, 1964, p.148). ハウ自身は『自伝』(p.274) の中などで、自分たちが “John Brown’s Body” を歌ってそれを聞いていた兵士たちから “Good for you!” (うまいね) と言われたと書いているので、すでに知っている歌であった (また, Howe, “Notes on the Battle-Hymn of the Republic,” p.629; Florence Howe Hall, *The Story of the Battle Hymn of the Republic*, New York and London: Harper & Brothers, 1916, p.51 も参照; 後者の著者はハウの娘である)。
- 47) *The Atlantic Monthly* (vol.9, Feb. 1862, no.52), p.10. 2月号は1862年1月16日に版權登録がなされていて、これが最初の印刷版であると一般に伝えられている。しかし、それ以前の1月14日号の *New-York Daily Tribune* に “From The February Atlantic Monthly” との但し書きを付けて全文が掲載されており、雑誌社から新聞社に写しかゲラ刷りが送られていたと考えられる、という (Fuld, pp.133-34)。
- 48) Hall, p.57; Stutler, p.38; Bakeless, p.60. 原稿料は「10ドル」との記述 (Louise

Hall Tharp, *A Sounding Trumpet: Julia Ward Howe and Battle Hymn of the Republic*, New York: Robert M. McBride and Company, 1944, p.183) もあるが、誤りであろう。

- 49) Fuld, p.134. 出版社は Oliver Ditson & Co. (277 Washington St., Boston) で、楽譜 (“Battle Hymn of the Republic”) の表紙には “Adapted to the favorite Melody of ‘Glory Hallelujah.’ Written by Mrs. Dr. S. G. Howe, for the Atlantic Monthly.” と書かれている。簡単な前奏と和声のピアノ伴奏を付けたもので、これは同社が前年に出版した “The Popular Refrain of Glory, Hallelujah!—As sung by the Federal Volunteers” (“Ellsworth’s body lies a mould’ring in the grave” で始まる歌詞) の編曲をそのまま流用して歌詞を取り替えただけであり、コーラス部分はハウの知っていた歌詞・リズムではないかもしれない (いずれにも編曲者の名はない)。これらのファクシミリ楽譜は 2 点とも Richard Crawford, ed., *The Civil War Songbook* (New York: Dover, 1977, pp.5-12) および The Lester S. Levy Collection of Sheet Music に、前者のファクシミリ版は Jackson, *Popular Songs of Nineteenth-Century America* (pp.22-25) に、後者は American Memory にある。
- 50) Hall, p.54.
- 51) *Songs of Praise* (Oxford University Press, 1931, no.578, “Battle Song”) [ただし、Martin Shaw が新たに作曲したまったく異なる曲で、コーラス部分がない]; *BBC Songs of Praise* (Oxford University Press, 1997, no.156); *The United Methodist Hymnal* (no.717) [ただし、この第6連のみ作詞者を “anon.” としていて語句も少し変えている]。
- 52) Howe, *Reminiscences*, between pp.276 and 277. この自筆草稿は同行した Whipple 夫人に後になって贈ったもので、ワシントンの衛生委員会の便箋を使って書かれている。2枚目の裏に “Battle Hymn of the Republic” との題名が書き加えてある。

(一橋大学大学院経済学研究科教授)